

## 研究結果

研究タイトル：

「日本とベトナムにおける漢字・漢文の受容過程に関する比較研究」

本研究は、日越の漢字・漢文に纏わる諸問題（漢字文化の直接的受容、漢文訓読、国字など）の考察を通じて、日本とベトナムにおける漢字・漢文受容の共通点を明らかにすることを目的としている。

2007年9月10日から17日まで、日本を訪問し、次のような研究調査を行った。

- ア．首都大学東京を拠点として、まず、首都大学東京の清水政明准教授にテーマについて意見を仰ぎ、日越の漢字の受容歴史と両国の漢字の差異について意見を交換した。また、首都大学東京大学で資料調査を行い、『日本語の世界』4「日本の漢字」、『日本漢字音の歴史』などを入手した。
- イ．二松学舎大学を訪問し、漢字と漢文学の専門家佐藤進教授と町泉寿郎教授にテーマについて意見を仰ぎ、また、漢字、漢文学に関する情報を交換し、共同研究の場を設け、研究ネットワークを構築するべく準備作業を行った。
- ウ．早稲田大学を訪問し、漢字と漢文学の専門家笹原宏之教授と漢字、漢文学に関する情報を交換し、テーマについて意見を仰いだ。

帰国後、日本での収集した資料を講読し、ベトナムにおける漢字・漢文の受容過程について検討し、日本と同様漢文訓読に関する資料を収集し、比較研究を進めている。現時点での暫定的な見解の概要は以下の通りである。

1. 地理的に中国と接し漢字との出会いを繰り返すうちに、ベトナム人は日本人のようにベトナム語を表記するために漢字及びベトナム製の漢字（日本の国字に相当する）が使われた。しかし、紀元10世紀における中国からの独立以降、中国語の音韻変化の影響をそれほど強く受けることなく、独自の漢字音形成の道を歩んだ。また、ベトナムの漢文の中には、いわゆる正規の漢文以外に日本の漢字仮名交じり文同様、漢字「字喃」交じり文とも呼ぶべき変体漢文が存在する。また、日本のように、漢字の字義をベトナムでも引伸し、派生させたり転化させて用いた跡が見られる。例えば、漢字の「仔細」は、ベトナム語では「親切的な」ことを意味する。
2. 漢字にベトナム語を当てて読むことは古くから行われてきたため、日本の「訓」と「訓読」のようにベトナムの漢文訓読を定着させることとなった可能性が否定できない。漢字の「山」を例にとると、日本の「サン」のようにベトナム語で「son」と発音され（「漢越音」）、それが「音」である。「義」はまた日本の「やま」と同様「nui」という。つまり、漢字の意味するところ、それが「義」である。ベトナム人が漢字を学習する際には、今も昔も字形を習い、ついで字音と字義とを習うという順序であったに違いない。そして、その字義を母語で説いているものが、やがて「訓」となって、社会的に固定する。それは、一時的で自由な懇意的表現ではない。漢字「字喃」交じり文を検討すると、歴史段階を経ても、「山」を「nui」と読むのが社会的に固定して、自由に変更できるものではないが、「訓読」の中には、どれが前漢越音（古漢越音の音と意味をかりたもの）か、どれが訓読で読まれた音（漢字の意味のみを借りたもの）のか、などの区別が非常に困難である。さらに、ベトナム漢文の「訓読」の適用範囲に関する、歴史音韻学的あるいは理論的な研究という非常に難しい課題も残されていると言わざるをえない。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名：「日本とベトナムにおける漢字・漢文の受容過程に関する比較研究」について  
対象者：ハノイ社会科学大学、漢喃学部の学生と大学院生及び漢喃研究所の若手研究者  
場所：社会科学人文大学、漢喃研究室。時間：2008年3月13日  
所在地：336, NGUYEN TRAI, THANH XUAN, HA NOI.

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

題名： 「日本の漢文訓読について」  
発表者名： PHAM VAN KHOAI－NGUYEN THIOANH  
論文掲載誌：言語研究雑誌、あるいは漢喃雑誌  
掲載時期：12月ごろ

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

題名： 『日本漢文』  
著者名： PHAM VAN KHOAI－NGUYEN THIOANH－YA九仏BE SUSU肌r  
出版社： ハノイ国家大学出版社  
発行時期(予定)：2009年12月